

## 新ビジョン企画委員会 第3回会議 議事録

1 日 時：令和3年11月11日（木）17:00～19:00

2 場 所：兵庫県庁2号館 2階 参与員室

### 3 出席者

委 員：石川委員長、大平委員、織田澤委員、坂本委員、笹嶋委員、永田委員、  
中塚委員、野津委員、丸尾委員（以上9名）

県 側：坂本県参事、城谷ビジョン局長、木南ビジョン課長

### 4 内容

#### （1）坂本参事挨拶

ご参加いただきお礼申し上げます。前回骨子案を示してご意見をいただき、その後、長期ビジョン審議会も開催していろいろなご意見をいただいた。地域を回って県民の声を聞く地域未来フォーラムも順次開催している。今日お示しした本体案は、それらの意見を反映してまとめたものである。ページ数が少なく、これだけかと思われるかもしれないが、これまでお渡ししたデータや県民の意見は、すべて参考資料として別途まとめる予定だ。ビジョン本体は、これぐらいのボリュームのものとしてまとめたい。分厚い冊子は見てもらえない。新しいビジョンはなるべくシンプルなものにして、各種データは関心のある方に参照いただけるようにしたい。

本体案ではめざす社会の姿に解説をつけている。ページ上部のスライドの「例えば」という記載の仕方がよいかどうかは引き続き考えていくが、ページ下部の文章の部分が最終的に議案となっていくものである。

本委員会は当初全4回を予定していたが、スケジュールの都合で今回が最後となる。忌憚のないご意見をいただき、最終案に向けて整理をしていきたい。

#### （2）事務局から本日の論点を説明（省略）

#### （3）意見交換

##### 石川委員長

今日が最後ということだが、いつものように皆さんに忌憚のないご意見をいただきたい。今日は名簿の下から順にコメントをいただきたい。丸尾委員が遅参、松永委員が欠席のため、野津委員に願います。

##### 野津委員

第2回会議で皆さんから様々な意見が出て、これほど意見を出してどうまとめるのだろうと思っていたが、一件、一件、とても真摯に対応していただいている。無茶も承知で言ったことが何らかの形で盛り込まれている。より良いものになったと感じた。

前回いろいろと申し上げたが、今回は思った通りの方向でまとめ直していただけたとい

う感想である。バランス良く、かつ尖ったものになっていると思う。五国の交流を前面に打ち出していただいたのは、但馬の人間としてはとても嬉しい。こういう形で兵庫県として一つにまとまっていけたら良いという思いで案を拝見した。

### 中塚委員

私も、素晴らしいというのが第一印象だ。前回の農業に関するコメントも反映いただき、十分練られた、よいビジョンになっていると思う。シンプルなものもよい。あえて言うなら、市町の総合計画との連携をうまく取っていくことが大事だと思う。県のビジョンが上ではないということで、これ以上の書き方は難しいだろうが、この点を意識しておくのも大事なことだと思う。そこが少し気になった。

### 永田委員

私も同じような意見だ。大筋として今までの議論が組み込まれて伝わりやすくなっていると思う。ただ、学生とこれについて議論したときに思ったことは、社会潮流の1～6や、めざす社会が5つあり、その中でめざす姿がさらに分かれている、その作りが少しわかりにくい。いくつも番号が出てきて、社会潮流の1番がめざす社会の1番に対応しているのか、独立しているのかといったことが気になる。例えば基本事項のところは思い切って黒のトーンにするなどデザインで示すとか、またはつながっているということを情報で示してもよいと思うが、ここまで整理されると逆に混乱する面もあるように思う。学生からも、社会潮流の1番の人口減少はめざす姿の何番に入るのかといった質問があったので、もう一押し、取りつきやすさを工夫できないか。

### 石川委員長

社会変化の潮流の全体が後ろのビジョンにかかってくるという形になっているが、そこがちょっと見えづらいのかもしれない。見せ方の問題だと思う。

### 中塚委員

関連で一つ質問だが、この資料はどのように使われるのか。このまま使われるものなのか。県民に広く使ってもらえるものだとすれば、お金をかけてでも、プロの手をかけたものに仕上げていく必要があるよう思う。

### 木南課長

新全県ビジョンとしてはこれが正式版であり、議決をいただく内容になる。ただ、これだけで伝えることは難しいので、新年度に子ども用・若者用など対象を明確にして、わかりやすいパンフレット、写真雑誌のようなイメージのものを業者に発注して作成したいと考えている。また、動画を作ったらよいというご意見もいただいております、予算との兼ね合いもあるが、検討を進めている。県民の皆さんの目に触れるものはそうしたものになっていく。県庁内や市町ともこの考え方を共有していく。

## 笹嶋委員

大学の教員をしているので、若い人たちをどう引っ張っていったらよいのかという視点でこの資料を見ていた。今の若い人たちは非常に我慢強く、また、現状に満足している。

防災の避難訓練で高齢者にシミュレーション結果を示して南海トラフ地震が起きたら何十分後に津波が到達すると言っても、「どうせ老い先短い人生だからいいよ」と言われて、どうしようもなかったことがあるが、高齢者だけでなく、今は若い人もあまり欲がない。ビジョンを作ってきた我々には、その先にある理想型が見えているので、これをやればそこにいこうというモチベーションがあるのだが、これをどう見せていったら若い人たちは付いてくるだろうか。

そう思うと、やはり最後の「動かす仕組み」が大事だ。彼らも面白そうなことをすると集まってくる。学内コンペなどをやると勝った負けたで悔しがったりするので、競争しようという気持ちもある。やったら得だとか、やって当たり前とか、若者に響く見せ方を考えないといけない。このビジョンだけ見せても「いい未来ですね」で終わってしまう。どうしたら彼らを巻き込んでいけるかがこれから考えるべき課題だと感じた。

## 石川委員長

まさになるほどと思わされる意見だ。学生はなかなか地域のことを自分事として考えられない。未来もよくわからない中で、今を生きるので精一杯、今のままでとりあえずいいや、というマインドになってしまっている。地域のこと、未来のことを自分事して考えるというところへ、いかに巻き込んでいくか。その意味では、上からビジョンが降ってきたのではなく、これを使って学生が考える機会をもっと作る。テキストとまでは言わないけれども、学生がこれを見て、しっかり深掘りするような機会を作る、そういう仕掛けを作れたら、学生が、兵庫県はこんなこと考えてるんだ、こんな社会になるかもしれないんだとわかり、ビジョンを考えることにつながるだろう。

## 笹嶋委員

例えば、平均寿命が80歳前の頃に設計された年金制度のままではダメだ、でもこうやったら人生100年時代でも何とかなる、みたいに、わかりやすく、やんわりと脅すと言うか、やった方が得だというような伝え方が必要なのだと思う。そんなことを大学生に限らず、もっと小さな時からでもやって、僕らが自分事として思って動いていかないと、いずれ行き詰まる、楽しくない世の中になるということをわかってもらう。これをやり過ぎると逆に萎えてしまうかもしれないが、その辺の塩梅もよく考えて、若者をどう巻き込んでいくかを考えていくことが大事だと思う。

## 石川委員長

中塚委員の話にもあったが、ビジョンができることがゴールではなくて、ここからが新たなスタートだ。これをどう活用していくか、どう地域を巻き込んでいくか、若者を巻き

込んでいくか、ここをしっかりと考える必要がある。ビジョンができた、お疲れ様、となってしまうがちだが、そうならない仕掛けづくりを改めて考えていく必要がある。

## 野津委員

私は今但馬の新設大学で教員をしている。少し違うと感じたのは、豊岡に演劇と観光を学びたいと全国から集まってきた学生たちは、教員が何をしても怒らなくて我慢強いというのとは真逆で、じゃんじゃん要望、要求が出てくる。夢を叶えるために縁もゆかりもない但馬まで来たのに、この大学の体制はどうなんだ、期待していたのと違う、どうなってるんだ、どうしていくんだ、とガンガン言われる。これを私はポジティブに捉えていて、要望があり、提案もあるという、すごくいい流れができています。

この状況をビジョンと重ねてみると、やりたいことがある、自分らしく生きたいといった、このビジョンに書いてあるようなことに共鳴して、外から兵庫を選んでくれる、ある意味よそ者である若者は、このビジョンを牽引できる可能性があると思う。自分らしく生きられる、自由に働ける、新しいことに何度でも挑戦できて、それで自立した生活ができる、こうしたビジョンを盛り上げていけば、そうした人が増えていくと思うし、そういう人が増えれば、こういうビジョンが盛り上がると思う。

作って終わりではなく、このビジョンに沿った活動をする人たちをどう応援していくかが重要だ。実効的な政策がどんどん出てくると、本当にそういう人たちが集まってきて、そういうことをしてもいいんだ、という空気が醸成されて、少しずつ社会の雰囲気が変わっていくと思う。ビジョンにはそういう力があるはずだ。ビジョンをお題目にしないための具体的な支援を県政がしていく、いろんなことにビジョンを紐づけて、ビジョンを盾にしていろんな活動を応援していく、こうしたことをどこまで広げ、継続できるかが、今後の鍵になる。

## 石川委員長

若者を引っ張るのは若者なのかもしれない。若者の二極化が進んでいる。前へ前へと進んでいく若者がいる一方で、内へ内へともってしまいがちな若者がいる。この二極化が進み、両者がまったく相容れず、別の方向に向かっている状況があるが、ここをくっつけるのがビジョンなのかもしれない。大人たちが横から上から若者に頑張れよと言っても、若者の耳に入らないが、若者たち自身がサイクルを回すことでビジョンが盛り上がっていくような仕組みができれば面白い。そうした意味からも、作ったビジョンをいかにして活用するか、具体的な支援にどうつなげるかをしっかりと考えていく必要がある。

## 野津委員

若者自体は我々が余計なことをしなくても自走できるポテンシャルを本来持っている。だが、社会の圧力で、自分で枠を作ってしまう、とりあえず無難にしておくのがいいんじゃないかと考えてしまう状況があるので、それをいかに外して、どんどんやっていいんだよと言っていけるかがポイントだ。

こうしたビジョンは総花的になりがちだが、今回めざす姿の一つ目に「自分らしく」とあって、さらにその一つ目に「自由になる」と掲げているのが、すごく尖っていて、若者をエンカレッジできる可能性のある良いビジョンになっていると思って拝見した。

## 坂本委員

シンプルなのがすごくよい。最初から電話帳みたいなものだと読む気がなくなる。

一方で、この会議に3回出席して、自治体、大学と民間企業の中の乖離のようなものを感じたというのが正直なところだ。

具体的には第3部の「実現に向けて」。この内容がダメだというわけではない。しかし、民間企業から見ると、これは宗教である。「大きな連携の輪をつくる」「バーチャルを使いこなし、リアルを大切に作る」、これを当社の新入社員に読ませて、兵庫県と一緒にビジネスやってこいと言っても、彼らは何をやっていいかわからないだろう。書かれている内容はこれでよいが、その下に何がぶら下がっているかを、別紙でもよいので、はっきり書かないといけない。

典型的な例は、裾野市のSDGs未来都市構想。最初の部分には、やはり宗教的な「人間らしい豊かな生活を送れるスマートシティ」といった、何それ、ということが書いてあるが、ページをめくると「地域戦略作物キヌアの試験栽培」「富士山麓でのスポーツツーリズム」といった細かいことが書いてある。富士山を観光資源にする、衛星測位技術を使って農業を発展させる、データ連携基盤と都市OSを整備するなど、民間企業が見て、うちの商売はここに当たる、と分かるようになっていて、そこに対して参画しようというアクションが起きやすい。裾野市では現実に60社を超える民間企業がそこに参画している。裾野市は実はトヨタのウーブンシティのある場所なのだが、裾野市は、それだけに引っ張られずに、地域戦略作物キヌアを栽培するといったこともビジョンに書いていて、リアルに何をするかを、自分たちの予算でできることとして、2～3年よりもう少し先の将来を見据えて示している。こうしたリアリティをビジョンのどこかに書いておく必要がある。民間企業が見てアクションを起こせるようなビジョンである必要がある。

例えば兵庫県では神戸牛が一つのブランドだが、牛を育てるという仕事に神戸の大学生が入りたがるかという問題がある。当社では六甲山牧場と話をして牧場DXを始めたところだが、そういったことをすれば、これまでは牛大好きという若者が就職していた牧場に、これからは私が学んだIT技術で牧場をもっと効率化したい、という若者が入っていくかもしれない。実は今牧場はものすごくIT化を進めないといけない場所だ。高齢化と後継者難に直面していて、早急にIT化しないと経営が成り立たなくなる。今六甲山牧場と一緒にやっている牧場DXが、本当に正しいか、正しくないかはこれからの話だが、とにかく何かアクションにつながる部分が書かれていないといけないと思う。

## 石川委員長

企業の立場から、具体的に何をしていくかが、このビジョンではなかなか見えてこないという指摘である。今後、ここから紐付けて考えていくということになるのか。

## 木南課長

今回は、「めざす姿」をきちんと記述することに注力した。「取組の方向性」をもう少しきちんと、坂本委員が言われるように、「これをやっていくんだな」と分かるような形で書く必要があるが、現在は表面的な記述に止まっている。今後の作業として、一つは、この部分をもう少し具体的に書くということ。もう一つは来年度、地域創生戦略をビジョンの実施計画と位置づけて改定しようとしている。現行の地域創生戦略はフルセットの分厚い冊子だが、これもこのビジョンに倣って、できればもう少し重点化して魅力的なプロジェクトを展開していくような形にしたい。その中に、民間企業の方が見て「これ面白そう」と思えるような取組の切り口を入れていくといったことができればと思っている。

## 坂本参事

皆さんに聞きたいのは「取組の方向性」が、今は多分に行政がやることを意識して書いているが、たくさん書かずに、例えば3つ、4つ、例示的に具体的内容として、行政と企業の両方が取り組めるようなプロジェクトの方向といった形で書く方が良いのか。それとも割り切って、県が実施する施策を書く方が良いのか。どちらが皆さんに響くだろうか。

## 坂本委員

施策として「これをやります」と言い切ると、行政が責任を負うことになる。「こういうことをやると県民がハッピーになると思います」ぐらいの感じで見せたら、そこまでの責任を県が負うのなら、それに対して「うちのこの商材が合う」「一緒になって協力しよう」という企業は手を上げると思う。「県民のためにこれをやると決めました」と言ってしまうと、やらなかったとき、あるいは、やってもその効果が県民に跳ね返っていなければ、県としては窮地に立たされることになる。このビジョンを題材にして、県民に「やります」ではなくて、「これをやればこんなメリット、プラスがあると思います」というような世界観、ある種の個人の意見的な言い方にする。それでも十分メッセージとしては民間企業には伝わる。それを見て「それに乗っかっていこう」という民間企業は出てくると思う。

## 坂本参事

リアリティという話になると、ビジョンには下位計画もあり、詳細には書き切れない。下位計画の中にリアリティは入ってくる。取組の方向性は、もう少しイメージ的なものを具体的に示すぐらいが精一杯かもしれない。

これはビジョンであり行政計画ではないため、個々の事業はなかなか書きづらい。「こんなことをしたらめざす姿につながっていきます」というイメージが沸くような、それでいて具体性がある程度ある、そのような例示を入れていくというイメージか。

## 坂本委員

具体例は先ほど紹介した裾野市が典型例で、かなり生々しく書いている。その記載を見

て「うちは関係ある」という民間企業が60社も集まっている。そこまでやらないにしても、今のままの記述では宗教の世界に見えてしまう。「この内容がこの資料のこれにつながっている」ということが分かる資料が別にある、それを見てください、という形でもよいと思う。県発信の「やります」という表現ではなくてもよく、「こういった世界観を県はめざしている」ということをもう少しリアルに書くことが必要だ。そうでないと、我々にしてみれば、商売なので、どこに自分たちの商材を当てていくかという議論にならない。そこはある程度のリアリティは必要だと思う。

## 石川委員長

これは全県ビジョンで、別に地域ビジョンもある。全県となると総花的で大きく書かざるを得ない部分がある。これが地域ビジョンになると、いろいろな地域特性を持つ兵庫なので、よりフォーカスされ、特化した形になるという意味で、もう少しリアリティが出ると思う。そうしたことも合わせて、協力してほしいステークホルダーにどう見せていくかということについて考えないといけない。

全県ビジョンで縛ってしまうことは難しいとしても、これだけでいいのか、と言う議論の中で、先ほど、いかに若者を巻き込むかと言う議論があったが、それと一緒に、いかに企業を巻き込むのか、ということについても考えていくべきだろう。

## 坂本委員

我々も県民であり、当たり前だが、税金を払っている。お殿様に年貢を払っているつもりはさらさらない。自分のお金を、私たちに良い県民サービスをやってください、ということで前払いしている。安全安心なまちづくりや健康寿命を伸ばすような施策など、県民がうれしいと感じるサービスを、前払いしていただいた税金でやります、と言ってくれば、それはうれしい。単に企業が儲かりますよ、ではなく、県民の立場で、県民が期待しているサービスをやります、やっていきたい、ということを見せる必要がある。

## 織田澤委員

5ページだけ見たら誤解して受け取られる可能性があるのではないかと感じた。過去を否定して、自由に、新しい社会をつくろう、という感じに受け取られてしまう可能性がある。フューチャーデザインといった話もあるが、世代を超えた話として、30年後に社会の主演となる10代はこのビジョンの策定にほとんど関わっていない。彼らの意見は、我々は想像するしかない。この問題をもう少し何とかしようというのがフューチャーデザインの考え方。一方で我々が一緒に議論していかないといけないもう一つの世代は前の世代ではないか。ある種、保守的な考え方だが、同じテーブルにつけない世代として、過去の世代を大切にすべきではないか。本体案を丁寧に見ていくと随所にちりばめられているが、このページだけ切り出されたときに、過去の閉鎖的な兵庫を全部捨てて、新しい兵庫に行くぞという感じに見えてしまう可能性がある。新しい文化の創造も素晴らしいが、これまでの文化も発展させるような視点が言葉として入っている方がよいと思う。

30年先なので、大学生はもちろんだが、もっと下の世代が、こういうものに触れて、これで良いんだと思って生きられるようなことを今からしていけないといけない。その意味で教育が大事だが、教育の現場はどうしても行政の中で聖域になっている。このセクショナリズムを排除してほしい。役所に期待したいのはまさにその点である。

今、学生が二極化しているということもあり、引きこもりほどではなくても、「自由に何かしてよ」と言う「それは困る」という学生が多い。結局、それまで物事を自分で考えることをしてきていない。いろいろなところでコンフリクトがありながら意思決定していく経験をするのが大切だ。近年、中高生が自分たちで制服について議論するという流れがある。娘の学校でも議論があり、すばらしく改善された。基本的にジャージで登校することになった。今は全員ジャージである。女子は白い三つ折りの靴下を履くことになっているが、これを三つ折りにしなくても良いということも決まった。これが意味のあることなのかは置いておくとして、小さな一歩ではある。このビジョンで問題視している閉塞感というものが社会の随所にある。そういうことを自分たちで議論して、自分たちで変える。その延長線上に、選挙にどれだけ行くかといった議論もある。今回の選挙も若者の投票率が非常に低かった。国民として恥ずかしいし、危機感を感じる。

また、17ページで、環境負荷の低い高度な移動交通網とある。この観点は非常に重要であるが、例えば「活動の自由を広げる」であるとか、「多様な活動を支える」という表現の方が、ここでは然るべき言葉かなと思う。

## 石川委員長

阪神・淡路大震災もそうだが、私たちは、過去に多くを学んできたが、単に経験で終わらせるのではなく、そこから知識を得て未来に活かしていくことが求められている。織田澤委員が言われたように、5ページだけ切り取って見てしまうと、新しいものが強調されて、過去はどうなってしまったんだと見られかねないというご指摘はよく分かる。もう少し過去を大切にというニュアンスを加えてもよいかもしれない。

また、小さい頃から地域のことを考える機会をしっかりと作っていくこともそうだが、自分たちが頑張れば世の中が変わるんだということが見えないと、何をしても仕方ない、というネガティブな気持ちになってしまう。最近の若者は自己肯定感が低いと言われる。個人的には懐疑的なところもあるが、自分がアクションすることで、何らかの変化があるということが見えてくれば、もう少し頑張ろうというアクションにつながるのではないか。その意味では「失敗しても大丈夫。支えるよ」という趣旨が、既に記載されているところではあるが、改めてそうした視点がしっかり入っているか見ていただきたい。

## 織田澤委員

人事査定でマイナス点が付かないことを重視する旧来的な日本のお役所、公務員像があるが、若い世代を見ていても、先生からのマイナス評価を気にして生活している様子が見える。そういう部分もすごく問題だと思う。

## 野津委員

織田澤委員の過去から学ぶ視点そのものについては、大変重要な観点であり賛成である。その礎があってこそ今の兵庫県があって、ここから先に進めるので、その先陣を切られた上の世代へのリスペクトは非常に大切である。

一方で、それをビジョンで主張していくかについては、慎重になった方がよいと思う。その要素も織り交ぜると、総花的になって、角が取れてしまって、確かにリスクは軽減されるものの、若者が「自分たちへメッセージが向けられていない」という捉え方をするとという別のリスクがある気がする。

若者の投票率の問題も、民主主義で多数決だと上の世代には勝てないという絶望感のようなものがある。政治が自分たちの方を向いていないということを、彼らは現実以上に意識している。2050年の現役世代である、今の若者をメインターゲットにしたメッセージの部分は、尖らせて主張した方がビジョンとしての価値が出ると思う。

その上で、内容をよく読むと、過去の歴史を踏まえたものになっているということはとても大事だ。今回のビジョンでも、阪神・淡路大震災の経験と教訓は、しっかりと踏まえてつくられているが、阪神・淡路大震災自体を目立たせるようにはなっていない。過去を踏まえるが、過度に過去の話を強調すると、若い世代に距離を取られてしまいかねないので、多少のリスクがあっても、今のこのビジョンの勢いを大切にしたいと思う。

また、新しいことが強調されている部分について、「今の閉鎖的な兵庫県を変える」という趣旨に捉えられかねないという話もあったが、一つ前のページで大変重要なことが書かれている。キーワードに掲げる「開放性」が、このビジョンの大きなポイントだと思うが、「県民が今、開放性を求めている」という部分が強調されると、過去をネガティブに捉えているように受け取られかねないのだが、実は二つ目に、開放性が兵庫の伝統であり強みであると書いてある。それは開国以来、神戸に港があって、という話からつながる伝統だと思うが、閉鎖的とは真逆のことが、ビジョンの冒頭の大事な部分で強調されている。ここに目が行く見せ方にして、その開放性を更に高めていくために、めざす姿があった、このビジョンの勢いを大事にした方がよいと思う。

## 石川委員長

先ほどのコメントは、5ページのめざす姿のメインを変える意図ではなく、その下の説明文に、もう少し過去を踏まえる要素を加えてはどうかという趣旨であったかと思うが。

## 織田澤委員

5ページで思ったのは、しっかり全体を読むと、様々な配慮が読み取れるのだが、今の世の中は分かりやすさが重視されるため、このページだけが切り取られて扱われるのではないかという可能性について申しあげた。先輩世代の無用な反発を買う必要もないので、配慮が伝わるニュアンスを出せば、そうした反発もかわせるのではないかと考えた。下の説明や随所にある記載は、よく配慮されているのでむしろ変える必要はなく、この部分だけ切り取られたときの準備があった方がよいという趣旨で発言した。

## 野津委員

切り取られたときにも開放性という言葉が残るような形になればよいかもしれない。

## 石川委員長

今の話で、やはり伝え方が大事だと感じた。切り取られるとそれが独り歩きして、そこだけで議論されてしまう。そうしたことにも気を遣っていく必要があるだろう。

## 大平委員

前回の委員会でも事務局を悩ませるような枠組みの話をしたが、そうしたことも反映いただいて感謝する。本体案の内容は、これまで議論してきたもので、練られたものになっているが、さらに事務局を悩ませてしまうかもしれない3点について申し上げる。

一点目が、4ページの「ビジョンの基調」について。県民がこの冊子を見たときにメッセージ性を感じるのは、ビジョンを見るにあたっての見方、ポイント、視点を与えるこの部分と、第3部の「実現に向けて」の部分だろう。5ページのコンセプトを動かすための視点やポイントとして、そういうところが大事だと思う。

その中でキーワードに掲げられている「開放性」は、これまで似たようなワードは出てきたかもしれないが、「開放性」というワード自体は初見になる。これは、齋藤知事が県議会で「開放性」ということを言っておられたところから来ていると思う。

その上の「県民の期待」は、県民の意見と大潮流から、こうした社会をめざしていったらよいのではないかというポイントとして、競争よりも包摂、効率よりも循環、という形で述べられており、開放性については、開放性の高い社会が求められているとあるが、これは、どちらかというとも2050年というよりは、すぐ近いところの話ではないか。開放性の高い、あるいは透明性の高い県政という意味で、短期的な期待として、県民から発せられている面が大きいのではないか。

その意味で、2050年という長期のビジョンのキーワードが「開放性」でよいのか、というところが引かかる。開放性の二つ目に書いてあるとおり、こうしたものは、元々兵庫県が持っている、兵庫県ならではの強みとして整理すべきもので、ビジョン全体で、県民全体で、開放性をめざそうというものではないのではないか。

港として栄えたということもあるし、私の専門で言うと、兵庫県は氷上回廊という本州で最も低い分水嶺を持っているので、人、モノ、生き物も含めて、北から南まで開放、交流が進んでいた県だと思う。そうした形の中で、遠い地域とも交流して、自分たちの暮らしを支えていたという気質があるということは、3ページの「進取の気風」でも整理されているが、そうしたものは前提であるという書き方をされるか、あるいは、このビジョンを進めていくために、県民と共に開放的に取り組んでいこうということで、第3部の「実現に向けて」のスローガンとして示す方がよいのではないか。

開放性についての県民の願いは、2050年の願いではないということ、「今求められているのは開放性の徹底」という開放性を説明する3つ目の文言でも示されている。その辺り

の整理を検討いただきたい。「ビジョンの基調」は、県民に対してのメッセージ、こうした背景の考え方でビジョンを考えたということを示すところだろう。宗教的かもしれないが、その見せ方には慎重であるべきだ。

二つ目は「動かす仕組み」について。まず先ほどの「開放性」について、県民の皆さんと開放性のある形で取り組んでいくといった基本姿勢として示すことはあり得ると思う。

22ページの「対話と学びの場づくり」については、大学等で出前講座をしてどうにかなるような場づくりではない気がする。今回のビジョンは、県や県と一緒に取り組んでいる方は教科書的に読むと思うが、これから参画する人、これから大人になる子どもたちには、将来構想試案のたくさんの未来シナリオのように、教科書というよりは参考書として読まれるものだろう。なので、ビジョンをもとにディスカッションを重ねてブラッシュアップしたり、具体化したりしていくプラットフォームを作るといったイメージが伝わるのが大事だと思う。ビジョンができたので、これをやってくださいね、という趣旨のものではないという余地を示すことが大事ではないか。

先導プロジェクトをどういった形で進めていくか。こうしたものを作っていく過程が、既存で決まっていることをやる、ではなく、民間あるいは県民からの自由な発案のもと、プロジェクトを構築していくということがしっかり述べられていることが大切だ。

また、22ページの一番下に「地域プロジェクトの推進」とあるが、ビジョン委員といった形で、従来式の委員会形式で、地域ならではの取組を進めていく形が、これからどこまで継承していけるだろうか。どういう形がよいのか対案はないが、それでビジョンが実現するのかというと、もっとそれだけではない形を示す必要がある。委員会と書くと、偉い人が決めるといったイメージもある。そうではなく、皆さんと一緒に、地域でどんどん盛り上げて、作っていききたいというメッセージを、もう少し具体的に書けないか。どこまでどういう形でやるかは、また別の所管になるのかもしれないが、若い人も入れるプラットフォームを作るといった意思を示すべきだろう。

3つ目は、細かいデザインのことだが、6ページ以降、コラムのような形で、用語の定義も含めて、右下に説明がされている部分が読み物として面白いが、大事なめざす姿よりも目立ってしまっている。視覚的な見え方だけが気になったので申し上げた。

## 石川委員長

開放性は過去から培われてきたもので、ビジョンとしてめざすべきものではないのではないかとご指摘だ。ビジョンの基調という言葉はどういう意図で使われているのか。

## 木南課長

基調は、全体を通じて、根底に流れている考え方という意味合いで使っている。

## 石川委員長

もしかしたらその部分がわかりにくくて、キーワードの開放性がめざすものと見えてしまうのではないか。

## 城谷局長

ここでいう開放性は、キーになる感覚というイメージであり、めざすものではない。

## 石川委員長

県民の期待とキーワードが一緒になっているので整理をされた方がよいかもしれない。

もう一つの「対話と学びの場づくり」は言われるとおりで、これだけだと昔のイメージにも見える。物事が上から降ってくるという受け身のイメージではなく、もっと双方向的に意見を言い合いながらやっていくイメージを持たれているとは思いますが、今の「対話と学びの場づくり」の書き方だと、受け身的な要素が強く見えるので、もう少し双方向的な要素が見えるような形にすべきだろう。

## 織田澤委員

何のたぐい対話するのかが書かれていない。若者が何のたぐい語らうのかは、未来を描いて、実現に向けてチャレンジするきっかけにするたぐいということではないか。

## 石川委員長

学びの場づくり、対話の場づくりについて、もう少しアクティブな方向で書くことを検討いたぐいしたい。

## 大平委員

事務局に聞きたいのたぐいだが、キーワードは、一体何のキーワードなのたぐい。

## 木南課長

ビジョン全体を貫くキーワード。めざす姿というよりは、前提とする心構え、考え方といたぐい意味で用いている。

## 城谷局長

そこに向かっていく姿勢とも言える。

## 大平委員

これは誰の姿勢なのたぐい。県民にもそれを強いるのたぐい。

## 木南課長

県民に強いるということではなく、ビジョンを取りまとめる上での視点という意味合いだ。

## 大平委員

そうなら上の「県民の期待」と同列でよいのではないか。特出ししないといけな理由

がよくわからない。

## 坂本参事

一つのキーワードを示せないかとの審議会の意見を受けて、ビジョンを考え、取り組んでいく中での根底にある姿勢というつもりで今回記載したが、書き方がそうになっていないというご指摘であるので、取扱いについて検討させていただく。

## 石川委員長

あと、ご指摘のあった専門用語の解説などの部分は、確かに目立つので、もう少し目立たなくした方がよいかもしれない。

## 丸尾委員

様々な言葉がある中で、洗練されていく過程に立ち合わせていただいで勉強になった。

6ページ以降、5つのめざす社会の「例えば」という例示があるが、動詞で終わっていたり、体言止めで終わっていたり、様々ある。22ページで「進捗状況の見える化」について記載があり、そのことを考慮すると、評価しやすい文言にした方が県民は理解しやすいのではないかと。例えば「・・・が広がる」であれば、広がったかどうかで評価できるので、動詞で終わる方がよいのではないかと。表現を検討いただきたい。

7ページ、「例えば」の上から2つ目。「共同生活のスタイルが広がり、孤独を感じずに暮らせる」という表現で、「孤独を感じずに」の表現が気になる。下のめざす姿にある「つながりを感じながら」の表現の方を用いて「共同生活のスタイルが広がり、つながりを感じながら暮らせる」という表現の方がよいのではないかと。

14ページ、「例えば」の上から3つ目。「24時間対応」という表現がいきなり具体的であると感ずる。県民の誤解を招く表現になりうるのではないかと。この部分を削除して、「充実した介護サービスが身近にある」といった表現の方がよいのではないかと。

同じく14ページ、「例えば」の上から4つ目。「困ったときに手を差し伸べてくれる人が地域にいる」といった表現の「人」は点でしかない。点ではなく線であることが重要である。めざす姿にある表現を用いて「困ったときに手を差し伸べてくれる地域のネットワークがある」とした方がよいのではないかと。

17ページ、「例えば」の上から2つ目。「感染症にも迅速に」という表現は、前回の意見で入れることになったかと思うが、これまでも新型インフルエンザなど新興感染症があり、兵庫は比較的早く対応してきたと思う。そのことも踏まえ、感染症の前に「新たな」といった言葉を入れた方が、将来の話であることが強調されるのではないかと。

22ページの「動かす仕組み」について、すでに他の委員からの発言もあったが、県民としてどう関わられるのかがわかる方がよい。自分がどこに手を上げればいいのか、どこにアクセスしたら参画できるのか、県民にわかるようにすることが大切だ。

## 石川委員長

それぞれいただいた意見は重要な指摘であり、事務局で対応をお願いする。動かす仕組みは、ハードルの高いものではない。ビジョンを他人事ではなく、身近に感じてもらうための仕掛けづくりが大切だと改めて感じる。

欠席の委員から意見をいただいているようなので、紹介してほしい。

## 木南課長

まず阿部委員のコメント。グローバルな価値観をローカルな住民がすぐに受け入れるのは難しいのではないかと。今後の課題はビジョンを根付かしていくこと。遠藤薫さんが三層モデルコンフリクトモデルを提唱している。グローバル、ローカル、ローカライズドのそれぞれのレベルの文化が、相互依存的に再帰的変容を起こす動的モデル。グローバル文化とローカル文化の軋轢を解消する役割を担うのが、ローカライズド文化。グローバル文化はローカライズド文化として、ローカル文化を変化させつつ、ローカルな場に徐々に根付いていく。ローカライズド文化の担い手として、若者やIターン、Uターン層などの「オルト・エリート」層に注目。彼らこそ「新時代を創出する担い手」で、ローカル文化をグローバル化する際のカギとなる。ビジョンを具現化し、根付かせるためには、ローカルな場で活躍する「オルト・エリート」層の存在が不可欠。こうした人材をいかに育て、確保していくか。こういった視点が、今後必要になってくる。

松永委員からは、先ほどもあった開放性についてコメントいただいた。キーワードにある「開放性」がやや伝わりにくい印象。「開放性」の高い社会というのが、現代の文脈ではどのように解釈されるのかももう少し議論が必要ではないか。いろいろな場面で「開放性」の捉え方が善し悪し両面ゆらぐような印象もある。開放性をどうアピールし、政策を通じて兵庫の地域社会で根付かせていくか、議論が欠かせない。

また、各論で、どのようにそれを実現するかが見えにくい箇所がある。特にめざす姿①の「自由になる働き方」の取組として、多様な働き方の推進、労働環境、労働市場の整備といったことを、県がどうやって推進していくのかが見えにくい。全体を通じて、産業や農業、文化に関しては政策として取り組む課題が明確な分、前半のめざす姿①の働き方やめざす姿②の居場所の取組の方向性が見えづらい。

また、分散型社会の方向性に関して、「分権」についての記載がない。

以上のコメントをいただいた。

## 中塚委員

16ページの農業に関するところ。フードテックという言葉が今まで出てきていなかったと思うが、なぜ急にでてきたのか。「フードテックによる超省力・高品質の生産体制」は日本語としておかしい。この文脈で使うのであれば、アグリテックではないか。

それと、全体を通じて、右下の用語解説の部分の位置づけが難しい。例示と言っても、強調された形になる。16ページであれば、フードテックを進めると読めてしまう。また、フードテックと畜産で逆のことを書いている。グローバルの中でフードテックはトレンドだが、定着するかわからない中で、大きく出てきていることについて疑問がある。

もう一点「地方」という言葉がよく出てくるが、県は地方創生戦略ではなく地域創生戦略と名前を付けたと聞いている。神戸から地方を見ているような言葉使いでよいのか。

また、パワーポイントで作られているが、行政レベルで使うモノであっても、いかにもパワーポイントですねというものではなく、少しだけでもデザインにお金をかけた方が、ビジョンの新しさが伝わると思う。

### 坂本委員

別の質問をしたい。県が市町にこのビジョンを作ったよ、この方針で行くよと示したときに、受ける側の市町は、県の方針だから絶対やるというスタンスなのか、それはそれとしてうちにはうちの方針があるという形なのか。その辺はどういう感じになるのか。

### 木南課長

基本的には後者だ。都道府県と市町村の関係は基本的には対等、横連携の関係なので、あくまで県はこういう方向性を目指しているんだということで、それに対して市町がよいと考えるなら、同じような方向性をまた市町の方で描いていただいてという形になる。

### 坂本委員

どなたか言っていたがまさしく参考書であって、これは合格しないとイケない受験のテストではないということか。

### 木南課長

そうだ。ただ、市町の意見は当然聞いて回っており、市町の意見を踏まえて作っている。

### 坂本委員

例えば神戸市と他の市町とはまったく違う。これを受け止めた方が自分たちの街が発展するという考えもあれば、そうとも言えないという受け止めもあり得る。市町の政策に、このビジョンはどれほどの影響があるものなのか。

### 木南課長

今度のビジョンでは、地域創生戦略を実施計画と位置付けることになる。ビジョンのもとに戦略を作り替え、それに基づいて、国の交付金、県の交付金などを活用していくという流れになると思われるので、その意味で、ある程度市町を誘導していくような形に、これまでのビジョンよりもなると考えられる。

### 石川委員長

本当にご苦労されてここまでまとめられてさすがだなと感動した。今日は非常に鋭いご指摘もたくさんあった。またいろんなところで揉まれていくものだと思うので、その意味では皆さんにもっともっと揉んでいただいてより良いものに作り上げていければと思う。

私も2つ指摘したい。15ページの「循環する地域経済」の中で「地域の中でお金が循環する社会」とあるが、もうお金ではないと思う。というのは、お金だけではなくて、かつこよく言うとリソースというのかもしれないが、人だったり、物だったり循環する社会になっている。下には少し書かれているが、人が交流し、物も、リサイクルやリユースもそうだが、循環し、お金だけが循環する社会ではなくなっていくと思う。昔ならお金の循環だけでよかったかもしれないが、未来を考えるとお金だけでは心もとない。

もう一つ、4ページの「ビジョンの基調」の県民の期待の一番下に「効率よりも持続する循環を」とある。「効率」というと悪いイメージに取られがちだが、経済学の世界ではそうではなく、必要なところに必要なものが行きわたることを「効率」と表現する。一般的には「効率」はネガティブなイメージが付いているが、実はそうではないということを経済の専門家として言っておきたい。「循環」に対抗する言葉は「効率」ではない。〇〇よりも循環と言うときに、そこに来るのは「効率」とは違う言葉だと思う。

#### 織田澤委員

「よりも」という表現が違うのかもしれない。

#### 坂本県参事

効率だけでなく、効率とともに、などの表現だろうか。

#### 石川委員長

効率が悪で、循環が善みたいなのが少し気になったので検討いただきたい。

皆さんから本当に忌憚ない多くの意見をいただいた。今日が最後の会議ということだが、何かあれば事務局に伝えていただきたいし、またフィードバックもあると思うので、今後ともよろしくお願ひしたい。

#### (4) 坂本県参事挨拶

今日も貴重なご意見いただき感謝申し上げます。どこまで意見を消化できるかが私どもに課せられた重たい宿題だ。精一杯努力してご意見を反映し、より良いものをまとめたい。デザインについてもできるだけ工夫をしたい。プロのデザイナーに任せてというのは少し難しいが、そこは工夫してデザイナーの意見を聞くなりしてやっていきたい。

オンラインは離れていてもこうして話せるのでよいが、集まって対面で話し合うことで生まれる空気感、そこから出てくる新しいものがイノベーションでは大事だと言われている。私としては8月の途中から参加ということもあるため、お会いできない委員がいたのが心残りだ。皆さんにお会いしたかった。今日の修正版は皆さんにお送りして、またご意見を伺うことになると思う。今後ともご指導いただきたい。

(以上)